

考 察

- ① 屋嘉田潟原は他の裾礁内海域と同様に波浪による影響は少ない。しかし台風による影響は小さくないものと推定されている。今回の調査期間中、沖繩島を通過した接近した台風はなかった。したがって台風時の波浪やそれによる底土の移動の程度などについては、観測することはできなかった。また盛夏や冬期の干潟およびその近接水域における水温の変化については、次年度にぜひ行ないたい。
- ② 調査された底質と底生動物の関係から：一般にこのような干潟海域の海浜部につらなる砂泥帯には、アラスジケマンガイやホソスジイナミガイがみられるが、今回の調査ではほとんどみられなかった。これは陸土一粘土の推積による影響とみられる。しかしそれに続くスガモ帯には沿岸外海性の強いウラキツキガイやクロチョウガイがみられる。このことによれば、ここは赤土の影響はほとんどないと解される。一方サンゴの死滅の原因として、粘土などオニヒトデの食害とは別の要因も否定されているわけではない。したがって赤土の影響の有無については、まだ結論しがたい。
- ③ 底質とスガモの生育帯の関係について：リュウキュウスガモは礫まじりの砂質のところにて生育し、ニラアマモは細砂地帯にみられる。この点については、なおくわしく追究し、藻場造成のための資料としたい。
- ④ スガモは強靱な根径を有しており、それによって砂礫質の地盤が保持され、ウニの生息場の適度の安定を与えているものと思われる。
- ⑤ シラヒゲウニの生息場はエゾバフンウニやバフンウニに比して、海底地形が平坦である。本潟原の平坦なほとんどの地帯にウニは生息しているが、調査期間中にみられた大型藻はごく限られた場所にしかみられない。ここにおけるウニの資源量を約100トンとしたが、これらの食藻や餌料効率を実験的手法を加えて、栄養がどのように補給されているかを検討する必要がある。
- ⑥ 本潟原における卵稚仔を含めてプランクトンの季節的消長を明らかにし、また魚類の裾礁内海域に対する依存度を摂取餌料、および産卵の時期や方式などの面から明らかにしたい。
- ⑦ シラヒゲウニやモズクは、今回の調査からこの海域の有用な、しかも技術的に増殖可能な生物とみられるので、この増殖技術を確立するための資料を把握しなければならない。
- ⑧ 調査設備を早急に整備して、本潟原底土について酸化還元電位差、合硫化物、有機炭素量等を加味した調査検討をさらに進め、本潟原底土の性状を具体的に把握するよう努める。
- ⑨ 本海域の栄養塩類及びChlorophyll量の消長について調査を行ない、一次生産力及び生産量について検討を進める。
- ⑩ 屋嘉田潟原の特性を把握するため、対照海域との並列的調査をする必要がある。

★★★

担 当

総 括	増 殖 室 長	伊野波盛仁	植物について	研究員	当真 武
無機環境について	主任研究員	田場 典秀	動物について	室 長	伊野波盛仁
	研究 助手	上原 孝喜	魚類について	研究員	新里 喜信